

汎用機を用いた風疹抗体の測定

○久米 俊久(極東製薬工業株式会社)

<はじめに>風疹は「三日はしか」とも呼ばれる比較的軽症の小児性ウイルス疾患である。風疹ウイルス抗体陰性の女性が妊娠初期に感染すると、胎盤を介して胎児がウイルスに感染し、白内障、難聴、心奇形などを主徴とする先天性風疹症候群（CRS:congenital rubella syndrome）を持った先天性異常を出生することがある。CRSの発現は臨床症状の軽度とは無関係で不顕性感染によって引き起こされることもあり得るので、臨床所見だけでは不十分であり血清学的検査が重要である。今回は汎用の自動分析機を用いた、ラテックス比濁度法による風疹ウイルス抗体測定用試薬ランピアラテックスRUBELLAについて発表する。

<方法>風疹ウイルス抗原をラテックス粒子に感作したラテックス比濁法で、検体にラテックス試薬を加えると検体中の風疹ウイルス抗体とラテックス粒子に吸着した抗原が抗原抗体反応を起こし、ラテックス粒子が凝集する。この凝集反応を波長600nmの吸光度変化量として測定する。

<結果>①精度:3種の陽性血清を連続10回測定した同時再現性はCV1.4~5.2%、また、10日間にわたって測定した日差再現性はCV2.5~8.8%と良好であった。②検出感度:風疹既往患者血清及び初期風疹患者血清を健常者陰性血清で2ⁿ倍段階的に希釈した試料を検出感度パネルとし、陽性を示した最終希釈倍数によって測定感度を比較したところ、いずれのパネルでも本法は±1管差の範囲内でHI法、ELISA法とほぼ同等の感度を有していた。③希釈試験:高抗体患者血清を健常者陰性血清で10段階希釈し、直線性を確認したところ、160IU/mlまでは原点を通る直線性が確認された。④HI法との相関:HI法陽性検体210検を用いて本法との相関性を求めたところ相関係数 $r=0.819$ 回帰式 $y=0.908x+14.108$ が得られた。まとめ 本法は大量検体処理に有効と考えられた。